

犬舎収容限度を超える

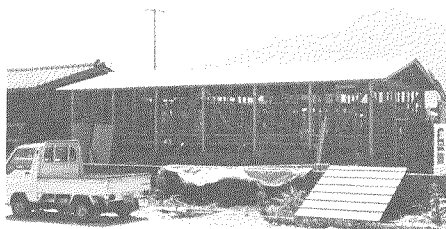
現在、被災動物を救う会は常時8名のスタッフ（アニマル・ライト・センターの専従スタッフ2名、地元のアルバイトスタッフ8名の交替）で運営されています。



朝の散歩から始まり、犬舎・猫舎の掃除・消毒、周辺の清掃、被災地で放浪する動物へのエサやり、捕獲活動、日頃の健康管理、不妊・去勢手術、病気への対処—獣医さんでの診察・治療・混合ワクチン接種・検便・駆虫・フィラリア予防、保護舎でのエサやり、子犬・子猫への授乳、シャンプー・ブラッシング、帰宅後の自宅を抱える動物たちの世話など、ケアと保護活動のみをとっても毎日が忙殺されています。さらに、事務作業、会計整理、里親を探し送り届けることなど、こなさなければならない様々な必要用件と、犬猫95匹は労力的に限界に達し、運営資金も大きな負担となっています。それでも私たちは見捨てられた動物の受け入れを拒否し、見殺しにはできません。「適当なところで見切りをつけ、受け入れを制限すべきだ!」という意見にも出会います。しかし、私たちは「最後まで断念せず、続けてよかった!」と言える日が来ることを望んでいます。

避難地使用期限—真近に迫る

犬舎の使用期限があと3ヶ月と迫りました。現在、犬舎猫舎の土地は2名の地主さんから無償でお借りしていますが、年末までには整地してお返ししなければなりません。猫舎・小一犬舎・隔離犬舎はいくらか継続可能ですが、このまま動物を抱えた状態で継続することは不可能です。この問題の解決策はいくつか挙げられます。



- ①全ての里親を探す（犬舎70猫舎25放浪犬50新生犬150プラス若干で約250強）
- ②代替地に犬舎を作る
- ③受け入れを今後完全に停める

③は実際問題として、非現実的な発想です。現地で活動を続けていると、動物の身を案ずる方々から、しばしば放浪犬の保護を依頼されます。そうしたとき、動物保護のために来た私たちが「もう保護することはできません。」と答えることができないことはご理解いただけたと思います。なぜなら、私たちが受け入れを拒否した場合彼らは、餓え死にするか、捕獲されて殺処分されるか、永く激しい苦痛をもたらす動物実験の後死に到るかのいずれかであることを私たちが最もよく知っているからです。（動物実験の苦痛について最近では一般的に語られるようになりました。私たちもまたこれまで実際に動物実験の現場に数多く立ち会ってきました。そのため推測からではなく、捕獲された動物たちが実験施設で何を経験するかよく理解できるのです。）

私たちは①②を組み合わせ考えています。これまで以上の積極的な里親探しと、残った動物が里親に出るまでの間、安心して過ごすことのできる代替地の確保です。それは同時に、里親に出なかった動物の余生を送る定住地にもなるようにと考えています。